

わたしたちの協会は、日中平和友好条約の精神を守り、子々孫々世々代々にわたって両国の友好を発展させるために努力し、新潟県及び日本と世界の平和と繁栄に貢献します。



特定非営利活動法人
新潟県日中友好協会
〒951-8068 新潟市上大川前通 7-1243
新潟商工会議所中央会館 2 階
TEL.025 (224) 6050 FAX.025 (224) 6051
会 長 長 谷 川 義 明
【 地 域 組 織 】
吉川日中友好協会 上越日中友好協会
新発田市日中友好協会 柏崎地域国際化協会
栃尾市日中友好協会 中之口日中友好協会
いわふね国際交流協会

所 感

お互いによき隣人として 友好の実を

平成 17 年度の活動も半年を過ぎましたが、会員の皆様方のご協力により本年度は大変いろいろな活動が行われている年となっております。

事務所の移転問題が懸案で御座いましたが、今野正敏事務局長の熱心な交渉のお陰で、前の新潟商工会議所ビル 2 階という好位置に適当なスペースを確保することができました。協会活動を円滑に継続することができておりますことはまことに有り難いことであります。

またかねてよりいろいろとチャレンジを重ねてまいりました黒龍江省との協力プロジェクトにつきましても、新潟県ご当局の外務省や JICA への強力な要請活動の結果、当協会の新潟県・黒龍江省嫩江流域荒漠化地区生態林建設技術協力プロジェクトが JICA の事業委託を受けることになりました。歴史的な成果といえると思います。いままでにこのプロジェクトを推進してこられた関係の皆様のご努力に厚く感謝申し上げます。

このプロジェクトの推進により飛砂による大気汚染、松花江、アムール川、日本海にいたる水質汚濁問題の解決への貢献や流域地域の生活経済の安定に貢献することができるよう努力したいものだと思います。

プロジェクト推進のための協議会が結成され、新潟大学理事副学長の伊藤忠雄教授に会長をお引き受けいただくことが出来ました。お忙しい中にもかかわらず、早速 7 月には自ら中国の現地へ訪問していただいております。

さらに事業実施に関する調査検討のため、専門家による 17 日間に及ぶ現地協議も行われました。厳しい気候条件のなかで長期の業務に携わっていただきました皆様のご苦勞に敬意を表します。

中国との友好の歴史的影響は私たちの生活の隅々にまで及んでおります。文字、思想、社会制度をはじめ芸術文化、食品、花木にいたるまで人物往来とともに深い関係にあります。この友好の歴史にたつて、さらにお互いによき隣人としての友好の実を挙げていかなければなりません。

当協会の活動もこの歴史的関係の中にあつて小さい部分ではありますが有意義な活動として貢献していきたいものだと思います。本年度のこれからの活動、さらに次年度へと会員の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成 17 年 10 月 11 日
会 長 長 谷 川 義 明

目 次

◇所感	-----P1
◇新潟・白音諾勒村“ふれあいの森”植樹の旅	-----P2
◇嫩江生態林建設技術協力事業始動	-----P6
◇互いに信頼と尊重の基に 初心にかえって地道な活動を 日中友好交流について	-----P10
◇近況 いわふね・吉川	
・いわふね国際交流協会へ名称変更	-----P11
・吉川日中 二つの講座開催中	-----P12

新潟・白音諾勒村

“ふれあいの森”植樹の旅
2005

800本の
松を植える

白音諾勒村小学校教育
条件改善協力事業が
同校裏手への植樹事業
へと発展



はじめに

黒龍江省林業庁の要請による嫩江流域の荒漠化地区生態林建設事業への取り組みに伴い、2004 年から本格的に始まった白音諾勒村小学校への教育設備機器購入協力活動は大きな拡がりを見せている。

2003 年 12 月と 2004 年 7 月に行われた現地調査の成果により、嫩江流域に生態林を造成するための技術協力が JICA によって正式に事業採択された。その条件として、当協会自身が民間団体として「汗」をかかなければならなくなった。

白音諾勒村は嫩江の中流域にあり、嫩江流域の生態林建設計画の対象地域であることから、白音諾勒村小学校裏手の荒地に“ふれあいの森”をつ

くろうとの合意が成り、7 月 20 日から 4 泊 5 日の植樹の旅が実現した。

18 名の参加者で構成され、団長には当協会の上之山喜男副会長を選び、副団長には奥村俊二理事長と伊藤忠雄新潟大学副学長があたることとなった。

哈爾濱到着の夜

新潟空港にて結団式の後、哈爾濱へ。黒龍江省外事弁公室の劉国軍氏と黒龍江海外旅游総公司の張銅順氏が出迎えてくれた。

夜、花園頓賓館での招待宴で趙爾力黒龍江省外事弁公室副主任は、「両省県の長い友好関係のなかでも、白音諾勒村小学校への協力、そして植林事業への発展に心より感謝している。“ふれあいの森”は今後の事業の“種まき”となり大きな実

“ふれあいの森”植樹の旅 2005 取扱旅行社

国土交通大臣登録旅行業第 939 号

株式会社農協観光上越支店

〒943-0817

上越市藤巻 5-30 JA えちご上越本店別館内

TEL 025-523-2994 FAX 025-526-2688

コスモスペシャル 上海・江南コース

(A) 上海 3 日間

12/15・1/3・1/19 ￥35,800

2/9・2/16 ￥45,800

(B) 上海・蘇州・錦溪 4 日間

12/17・1/14・1/28 ￥39,800

2/11・2/25 ￥49,800

山新観光（山形新聞・山形放送）グループ

株式会社 コスモトラベルビューロー

新潟県知事登録旅行業第 3-276 号

〒950-0076 新潟市沼垂西 1-4-2

TEL 025-244-0977 FAX 025-243-6028

りとなるだろう」と歓迎の言葉を述べられ、乾杯した。

これに対し上之山団長は、「新潟県と黒龍江省との友好関係は四半世紀を超えている。三江平原の開発協力にはじまる黒龍江省の農林業への協力支援が、今回の“ふれあいの森”植樹へとつながった。国どうしの関係は困難な時期にあるが、こんな時こそ民間交流を進めることが大事」と挨拶し、杯を交わした。

黒龍江省林業庁副庁長の楊国亭氏は、「今回の訪中団には多くの新しい友人がいる。植林事業は非常に大切なことで必ず成功するだろう。そのために私たちは最大限の努力を惜しまない」と述べた。

奥村副団長は、「私の友好活動の始めは三江平原。今は、杜爾伯特。哈爾濱から見れば東と西になるが、友好活動は確実に続いている。山本昭二さんと宮澤一也さんが道筋をつけた事業が、植林へと進んだ。今後は楊国亭先生の指導で味のある事業となるだろう」と語り、乾杯した。

杜爾伯特へ向かう

21 日朝、小雨のなか杜爾伯特へ向け出発した。雨でもあり、4 時間くらいかかるとのこと。大慶市への道路は至るところ工事中でなかなか進まない。予定時間を過ぎて市内に入るが、渋滞に巻き込まれた。そのうえ、工事のため迂回することとなった。知らない道に入ったらしく、運転手は道を聞き確かめながら進む。四苦八苦の進行となり、正午をまわって杜爾伯特県に入った。

県境には交通警察の車が待っていてくれた。そこから泰康鎮（杜爾伯特蒙古族自治県の県都）まで一時間ほど要するとのこと。

少し走ると見覚えのある景色が目に入り、位置の確認もできた。周りのひとにも走っている所を説明できるようになり、車内の雰囲気も少しは和らいできたようだ。

1 時ごろホテルに着き、昼食。

2 時まえにホテルを出るが、白音諾勒村への道路も工事中で普通なら 40 分ほどのところ 1 時間半の大迂回となった。「大龍虎泡」を右に見て、広い樟子松の林を過ぎて右折。簡易舗装の道は穴ボコだらけで、低速の安全運転となる。そんな道を 30 分、ようやく白音諾勒村小学校が見えてくるが、交差点には残土が山積。運転手は暫し思案の後、大きくハンドルを切りバスはようやく通過。思わず拍手が出る。

学校を目前にしてバスは再び停まる。左折箇所が狭く、大きな水溜りができている。運転手はまたまた思案の後、どうやら通過した。

「宮澤、お前こんなところに何回もよく来るな〜」。そんな会話のなか、泥に汚れたバスはようやく学校に着いた。

教育設備機器購入協力金の贈呈

そこには、待ちくたびれたであろう高学年の生徒や地域の人たち、学校関係者がいた。

早速、教育設備機器購入資金の贈呈式が行われ、OHP やラジカセ、顕微鏡などが贈られた。

そのうえ、上越から参加された牧絵一義、坪井稔、宮澤義和、比護久基の四氏より教材図書購入のため 1,000 元が校長に贈られた。

昨年、パソコン指導の担当と紹介された若い教師、邵彦君さんが校長に就任していた。

児童代表が、「日本のおじいさん、おばあさん。私たちのためにいろんな教材を贈ってくれてありがとうございます。一生懸命勉強します」とお礼の言葉を述べた。

昨年贈ったパソコンがどんなふうに使われているかと、起動してみた。低学年の生徒がつくったと思われる風船の絵が出てきた。

“ふれあいの森”を植樹

その後、“ふれあいの森”の碑が建てられた学校の裏手約 50 坪に、凡そ 800 本の樟子松を子

どもたちや関係者と一緒になって和やかに植林し、皆で記念の写真を撮った。

近くの民家を見学した後、来た道を難儀しながらホテルへ戻った。

夜の歓迎宴で、杜爾伯特県政府の司広武県長助理は今までの協力を感謝したうえで、「ふれあいの森」事業の意義を大切にしていきたい。この松が育つよう努力する。皆様、ご家族とともにまたこの地をご来訪下さい」と述べ、杯をあげた。これに続き上之山団長は、「心配した雨もあがり、最大の目的の“ふれあいの森”の植樹は、県や郷、そして学校関係者のご協力により無事終わった。今回植えた松が友好の架け橋となることを願っている」と述べ、乾杯した。

22 日朝、県を代表して見送りに出た女性党副書記陳麗芬氏の見送りを受け、杜爾伯特を後にした。

常任理事 宮澤 一也

解 説

白音諾勒村小学校教育条件改善協力事業は、新潟・国際協力ふれあい基金の助成を得て実施しています。

2004 年 6 月にパソコンとその周辺機器 10 セット、テレビと DVD プレイヤー 1 セットを贈呈。本年は机と椅子 100 セット、複写機 1 セット、OHP2 台、顕微鏡 8 台、録音機 6 台を贈呈した他、皆様からお寄せいただいた残余人民元

1,800 元を持参し教育図書を購入に充てました。

これまでの協力金総額は、日本円で 971,000 円となります。



■ 待ちくたびれたであろう子どもたち



■ 教育設備機器を贈呈

☆ 次ページに写真特集を組みました

新潟唯一の PCD

事務局代行 準備から運営まで
各分野のプロフェッショナルが完全サポート

株式会社

新潟コンベンションサービス
NIIGATA CONVENTION SERVICE

事業推進室

〒950-0088 新潟市万代 2 丁目 4-15-101
TEL 025-240-5400 FAX 025-240-5432
E-mail : niicon@net-web.ne.jp

中国ビジネスコンサルタント
(株) **NIIGATA GLOBAL BUSINESS**
N G B.corp

代表取締役社長 李 衛 強

〒950-0916 新潟市米山 2 丁目 6-2
にいがた e 起業館 201 号室
TEL 025-240-8877 FAX 025-240-8822

URL : www.ngbworld.com
E-mail : ngb@ngbworld.com



■ 灌水のため給水車が用意してあった



■ 立派な記念碑も



■ かいがいしい子どもたち



■ 杜爾伯特 TV 局の記者もスコップを握る

新潟・白音諾勒村“ふれあいの森”植樹事業は、(財)新潟県国際交流協会の国際交流団体事業補助金を得て実施しました。

植樹面積は約 50 ㍍、樹種は「樟子松」。樹種の選定や植栽方法については黒龍江省林業庁の技術協力をいただきました。現地では杜爾伯特蒙古族自治县林業局が苗木の準備や整地の指導に当たって下さり、大半の植樹は地元住民の方々のご協力で行われました。

整地費・苗木費・植栽費のほか向こう 10 年間の育成管理費計 241,000 円は、植樹の旅参加者のご協力金と上記補助金によって支弁させていただきました。

嫩江生態林建設技術協力事業始動

専門家が現地調査

はじめに

嫩江流域荒漠化地区生態林建設協力事業が、二つの枠組みで始動しました。

2005 年 7 月に実施した新潟・白音諾勒村“ふれあいの森”植樹事業に続いて、国際協力機構（JICA）草の根技術協力事業が 8 月にスタートし、専門家 7 名が 15 日から 31 日まで 17 日間に及び現地調査を行いました。

これまでの経緯

劉志原黒龍江省外事弁公室主任の協力要請を受けたのが 2002 年 11 月。以降 2003 年 11 月のコンタクトミッションと 2004 年 7 月の第二次ミッションを経て、JICA の採択内定を得たのが 2005 年 3 月。2 年余に及び取り組みの結果、実現に至ったものです。

JICA 草の根技術協力事業の概要

事業の名称は「新潟県・黒龍江省嫩江流域荒漠化地区生態林建設技術協力事業」、実施機関は「新潟県・黒龍江省嫩江流域荒漠化地区生態林建設技術協力推進協議会」です。

2005 年度から 2007 年度までの 3 年間で事業期間と定められ、JICA からの委託金が事業費に充てられます。

事業の実施目標は、嫩江中下流域の「丘陵区」・「平原区」・「風沙区」に適した生態林の造成ガイドラインを策定することに置かれています。

具体的には、2005 年度に三つの地区に調査試験区を設定し、既存林を生態林へと誘導するために必要な間伐を実施します。2006 年度は、既存林を対象に新たな樹種の追加植栽や無林地への新規植栽などを行います。2007 年度は、前年度に実施した追加植栽や新規植栽の結果等を分析した上で、生態林造成ガイドラインを策定

します。

この間、2006 年度、2007 年度には黒龍江省側の専門家を受け入れ、生態林の育成管理などについて研修を実施します。

事業対象地域の現況と課題

事業の対象となる嫩江中下流域は世界三大「黒土地帯」のひとつに数えられ、「穀物の倉庫」と呼ばれる地域です。

この地域の耕地面積は現状で約 500 万畝。1960 年代から 80 年代にかけて耕地開発が加速度的に進められました。この 20 年間に開発された耕地面積は 165 万畝に達し、それに伴って林地・草地面積は 92 万畝減少したとされています。

この地域は年平均降水量が 400mm から 500mm、年平均蒸発量が 1,200mm から 1,500mm という厳しい気象条件下にあります。

これに加えて、過去 100 年間で平均気温が 1.4℃上昇しています。特に近年に至り変動幅は大きくなり、1950 年から 1970 年の間に 0.72℃、1990 年代には 1.0℃気温が上昇しています。

その結果、旱魃被害面積は増加の一途をたどっています。ちなみに、1950 年代には 14 万畝にとどまっていた旱魃被害面積は、1970 年代に 53 万畝、1990 年代には 330 万畝に拡大しました。

植生の減少と繰り返す旱魃のため表層の耕作土の風蝕が激しく、1986 年のリモートセンシング（衛星から地上を観測する手法）によると表層土の流失面積は 467.1 万畝に及んでいます。

まとめると、不合理な耕地開発や過度の放牧などによる生態環境の人為的な破壊と気候変動の結果、この地域の耕地は急速に退化し荒漠化しつつあります。

嫩江中流域に位置する拝泉県は 1970 年代末に森林被覆率が 3.7%にまで下降し、表層土流失

が黒龍江省内で最も激しい県でした。

このため、1980 年代末に「黒土保護発展戦略」を策定し、全県規模で森林の造成に取り組みました。「生物ダム」により表層土の流失を防止するという戦略です。この結果、同県の森林被覆率は 22.8%にまで回復、表層土の流失は 88%減少し、土壌の有機質含有率も 0.51%高まりました。伴って、空気中の湿度が 10%から 14%増加するなど局地気象も緩和されました。

この例に見られるように、嫩江中下流域の生態環境の回復保全と農業の持続可能な発展のためには、この地域にふさわしい生態林の造成が不可欠です。

初年度事業の課題

事業着手に当たって新潟側専門家は、既存林の調査に加え、この地域の自然林または自然林に近い二次林の林分組成や構造調査が欠かせないことを事前に黒龍江省側に提案しておきました。

哈爾濱到着早々、はやくもこの提案をめぐる議論が交わされました。16 日朝、哈爾濱を発って齊齊哈爾に移動し、午後 4 時過ぎから事業の協力相手先である黒龍江省林業庁の担当者や「黒龍江省森林・環境科学研究院」（前称は「黒龍江省防護林研究所」）の専門家と議論を続けました。が、双方の考えは一致しません。



■ 合同調査団の全メンバー

〔合同調査団メンバー〕

春日健一（日中）・野表昌夫（新大講師）・平田敏彦（対外協）・目黒修治（対外協）・権田豊（新大助教授）・塚原雅美（県森林研）・今野正敏（県日中）・韓東明（林業庁）・孫淑芬（林業庁）・殷彤（林業庁）・許成啓（森林環境研）・俞冬興（森林環境研）・畢広有（森林環境研）・趙嶺（森林環境研）・朱星和（外弁対外服務センター）・張宇（外弁対外服務センター）

翌 17 日、改めて調査主旨を説明することから始め、丸一日を費やしようやく調査対象地と行程が確定しました。

結論的には、この地域に残っている自然林や二次林は極めて限られており、樹種にも大きな違いはないということでした。

このような条件の下、本来は黒龍江省の権限が及ばない国有林場の調査にも同意していただき、調査に厚みを加えることができました。

調査地点と調査団の編成

既存林の調査地点については、甘南県甘南林場、克山県北聯林場、杜爾伯特蒙古族自治县（泰康県）新店林場の三地点が事前に示されていました。

齊齊哈爾市をベースに、これらの調査地点までは車で片道概ね 2 時間から 3 時間の距離。日程が限られているために週末二日の休日返上を提案し、了解を得ての調査行となりました。

新潟側専門家 7 名に加え、黒龍江省側 6 名、そして黒龍江省外事弁公室の協力を得て同行願った通訳 2 名、計 15 名の集団が調査機材とともにマイクロバスを駆って移動を続けることとなりました。

調査の行程と業務、調査結果

8 月 18 日午後、最初の調査地点である甘南林場に到着。この地域は、嫩江中下流域では「平原区」に分類されます。

甘南県林業局の担当者の協力を得るため現地での作業要領を説明するが、なかなか意図が通じません。ままよ、何とかなるだろうとの思いで先を急ぎました。

現場は広大なカラマツの人工純林。植栽後 15 年を経過しているという。植栽本数は 1 畝当たり 5,000 本と多い。既に間伐が必要な時期に達している。

この既存林内に 50m×50m の試験区を 3 箇所×2 列設定したうえで、それぞれに 20m×20m の標本区を設け、毎木調査と土壌調査を行いました。



■ 毎木調査（甘南林場）

毎木調査は、既存林の生育状況と林分構造を把握し、試験間伐の強度を見極めるとともに追加植栽に適した樹種を想定するための作業です。

同時に、無林地に 50m×50m の試験植栽区 4 箇所を設定しました。無林地の試験植栽区には 2006 年春、樹種や植栽密度を変えた四つのパターンの植林を行う計画です。

林縁から広がる農地には、トウモロコシやヒマワリが作付けされていました。

土壌は、土壌断面の観察、土壌貫入計による土壌硬度の測定、土壌サンプルの理化学特性分析の三手法で調査しました。

土壌断面の表層にはリター（落葉や枯れ枝などの堆積物）がほとんど見られず、全体に硬く、土



■ 土壌貫入計による土壌硬度の計測
層の区分ははっきりしない。土色帖と照合の結果、土壌はチェルノーゼム（中国語では「黒鈣土」）。嫩江中下流域の代表的な土壌で、優良な耕作土とされる。土壌の理化学特性分析は現場では困難なため、齊齊哈爾に持ち帰って研究院に依頼することとしました。

甘南林場での調査は 19 日午前を終了しました。

20 日朝、二次林調査地点である克山県北聯林場に向け出発、3 時間の後現場へ到着しました。

現場は、標高 206.6m の緩傾斜地。嫩江中下流域では「丘陵区」に分類されます。



■ レーザー距離計による計測

蒙古栎や黒樺、シナノキなどが優占する落葉広葉樹の二次林で、針葉樹は含まれていない。100 年以上伐採されていないという。林内のギャップ（林内地表部の空隙）には陽樹であるヤマナラシ

が侵入している。林床には低灌木のハシバミが優占している。

20m×20m の標本区を 2 箇所設定し、組成調査と毎木調査を行いました。植生の優占度と群度を測定し、嫩江中下流域の環境に適した森林の種類と構造を見極めるための作業です。

甘南林場と同様、土壌調査を行いました。表土の腐植層は 20cm から 30cm に達していました。

新潟側専門家は、北海道の森林と大きな違いはないとの認識を得ました。



■ 北聯林場の二次林

二つの調査地点における業務の概要と結果は、以上のとおりです。他の調査地点に関しては別途専門家の報告に譲らせていただくこととして、以降の行程は次のとおりでした。

21 日全日、北聯林場において「樟子松」（ヨーロッパ赤松）の既存林の調査並びに無林地に試験植栽区を設定。

22 日朝、克山県を出発、五大連池市二龍山屯へ移動。所要時間約 2.5 時間。午後、五大連池市二龍山屯にて自然林を調査。この地域は、国有「沾河林業局」の管轄下であり、本来は黒龍江省林業庁の権限が及ばないところ。同行して下さった黒龍江省林業庁の韓東明さんの知人が沾河林業局におられ、その伝手を頼んで調査が実現したものです。

23 日午前、五大連池視察。午後、五大連池市

を出発、齊齊哈爾へ移動。所要時間約 5.5 時間。

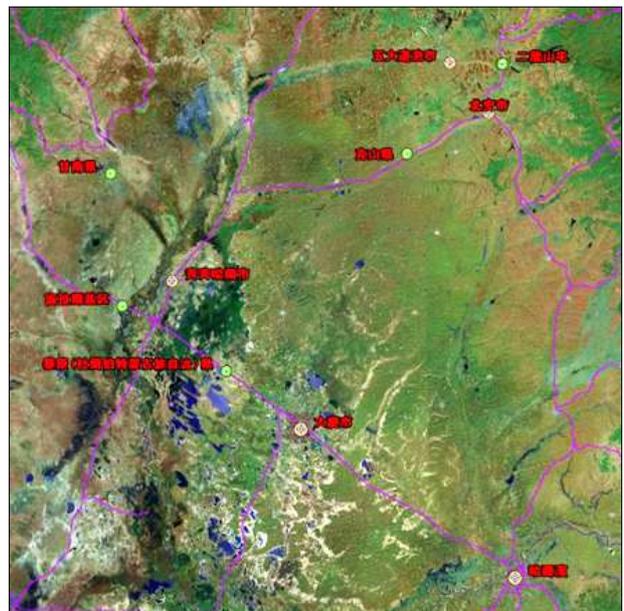
24 日朝、齊齊哈爾を出発、杜爾伯特蒙古族自治県（泰康県）へ移動。所要時間約 2.5 時間。午後、杜爾伯特蒙古族自治県（泰康県）新店林場において「小黑楊」（ポプラの一種）の既存林を調査。この地域は、嫩江中下流域では「風沙区」に分類されます。

25 日午前、新店林場において無林地に試験植栽区を設定。午後、齊齊哈爾に戻る。

26 日全日、黒龍江省森林・環境科学研究院にて打合せ会議。調査結果の取りまとめ、次年度以降の業務計画などについて協議。

27 日朝、齊齊哈爾を出発、哈爾濱へ戻る。所要時間約 4 時間。

新潟側専門家一行 7 名のうち 3 名が 28 日に帰国し、残る 4 名は 29 日と 30 日の両日にわたり林業庁、外事弁公室など関係機関への業務報告に当たりました。残留組は、機体不良のため哈爾濱空港に引き返すというトラブルにみまわれながら 31 日に帰国しました。



■ 対象地域の衛星画像と調査地点

まとめに代えて

どの調査地点に移動するのも片道 2 時間から 3 時間。車窓から見えるものは行けども行け

ども大豆かトウモロコシの畑。よくぞこれほどまでに耕したものだ、驚異さえ覚えました。巨大な人口を養うため、ひたすら耕地を開発してきた結果と思われます。耕地を風蝕から守るため林帯は確かにあるが、林網の区画は 1 平方 km 以上のものが大部分でした。

調査行に当たって、ハンディ GPS を持参しました。詳細な地図など提供されないだろうと予測し、調査地点の特定のために必要と思ったからです。各調査地点の緯度・経度を記録し、嫩江中下流域のフルカラー衛星画像に重ね合わせてみました。林地は濃緑色です。その緑が実に少ないのです。

黒龍江省林業庁の孫昌波氏の論文は、同省の 1 畝当たり森林蓄積量が、1950 年代初期の 118 立方 m から近年では 81.6 立方 m に減少していると指摘しています。同氏は、森林が水源涵養など生態保全機能を発揮するには 1 畝当たり 120 立方 m 以上の蓄積量が必要とし、蓄積量の効果的な増加を図るためには「純林」から「混交林」への転換を図らなければならないと主張しています。

初年度の調査結果をどう評価するかを巡り、文書のやりとりが行われています。中国が言う「混交林」の概念とこの事業が目標とする「生態林」の概念を改めてすり合わせ近似値を探ること、このことが事業の進展を左右する鍵となるように思われます。

常任理事・事務局長 今野 正敏

解 説

「新潟県・黒龍江省嫩江流域荒漠化地区生態林建設技術協力推進協議会」は、新潟大学・新潟県・新潟県対外科学技術交流協会・当協会の四者によって構成され、会長には新潟大学理事・副学長伊藤忠雄さん（当協会顧問）が就任しています。協議会の事務局は当協会内に置かれています。

互いに信頼と尊重の基に

初心にかえって地道な活動を

日中友好交流について

今年の 4 月 14 日、15 日の両日、長野市において第 10 回日中友好交流会議が開催された。この会議は二年毎に日中いずれかで開かれるもので、今年は日本が当番年に当たり、長野県日中が開催地を引き受けた。

この時期中国では激しい抗日運動が各地で起こり、従来とは違う緊迫感に包まれたなかでの開催であった。

日本側からは村山富一日中友好協会名誉顧問、野中広務名誉顧問、佐藤嘉恭会長代理、村岡久平理事長以下の幹部、地元長野県日中をはじめ各都道府県の代表など約 120 名、中国側からは宋健中日友好協会会長、陳永昌副会長以下の幹部、各省の人民対外友好協会及び友好団体の代表役 60 名が参加、黒龍江省からも趙爾力外事弁公室副主任、徐広明日本処長、劉国軍副処長が参加した。

会議初日は双方の挨拶のあと鈴木重郎、陳永昌両副会長の基調報告がなされ、以降は四つの分散会で討議が行われた。いずれの分散会でも主な議題となったのは、抗日運動の起因となった小泉首相の靖国神社参拝と教科書問題であった。

「靖国」の問題はまことに複雑である。神社の成り立ちとその後の経緯、国との関係、宗教法人としての性格と運営、国民の心(感)情と文化論、遺族会の存在等々、特に A 級戦犯の合祀は中国や韓国が問題視している点である。

考えなければいけないのは、どんな組織一会社や団体などにおいても、指導者が道を誤れば責任を負うのは当然である。まして日本を無益な戦争に突入させ、他国はもちろん自国民にも多大な犠牲をもたらした A 級戦犯の人たちをも合祀した靖国神社に、国を代表する総理大臣が参拝するこ

とは、何としても賛成できない。

翌日記念講演を行った野中広務氏は、講演のなかで靖国問題に触れ「靖国神社の矛盾を解決せずして、この問題の解決なし」と断言されている。

教科書問題については、私自身教科書そのものを読んだこともなく、一方中国の教科書、歴史教育についての批判もあるようだが、はっきり断することはできない。

ただ現在風化しつつある大東亜戦争なるものが何であったのか、もう一度よく考え検証し、わが国の現代史を見つめ直す必要があるのではないかと考えている。

分散会ではその他、環境問題—緑化、植樹事業もとりあげられた。

会議終了後、旧知の陳副会長とさまざまな問題について意見交換することができ大変有意義であった。また私の属した第二分散会で、趙爾力副主任が中国側の座長として活躍されたことを付記し敬意を表したい。

交流会議の二日目は、各分散会の報告に続き、日本側村岡理事長、中国側陳副会長がそれぞれ総括発言を行い、閉会した。

今から 33 年前、時の田中総理と周恩来総理が、幾多の困難を乗り越えて国交回復を果たして以来、現在ほど両国民の間に疎遠感が生じている時期はない。

「政冷経熱」という言葉もあるが、国と国との

間には常に問題が起こることは当然で、大切なことは双方に良好な国民感情が存在するか否かである。このような時にこそ、初心にかえって、地道な活動をお互いに信頼と尊重の基に率直な議論を交換して、両国の友好関係に努力すべきであろう。その意味で当協会の「希望工程」と「緑化・植樹」等の事業は当を得たものであり、その継続性こそが重要であると思う。

受任理事 巾 昭

近況 いわふね・吉川

♪いわふね国際交流協会へ名称変更

昨年は神林村が中国・黒龍江省二道河農場と友好意向書を取り交わして 10 年目になることから同農場を訪問（18 名）したり、韓国・襄陽郡とのふれあいの旅に参加（13 名）したりで大変忙しい年でした。

今年は大きな事業は控え、海外から岩船地域に嫁いでこられた方々において願って私どもや行政に対しての要望や困っていることなどの話し合いをしていただき、解決に向けてご協力申し上げる「意見交換会」を実施する予定です。

これまでは中国の方々を対象に実施していましたが、韓国やフィリピンなどから嫁いでこられた方も多くいらっしゃることから、今年度の総会で会の名称を「いわふね日中友好協会」から「い

いわふね国際交流協会

会長 澤田 洋一

〒959-3424

岩船郡神林村大字牧目 576
穂菜味亭気付

TEL.0254-66-7809

吉川日中友好協会

会長 八木 司

〒949-3445

上越市吉川区原之町 2010 番地 8
吉川土地改良区気付

TEL.025-548-2808

わふね国際交流協会」に改めさせていただき、より幅広く活動できるようにいたしました。

国際交流協会でありながら新潟県日中友好協会にのみ加入し会費を納めるのは如何かというようなことにならないよう、会則には新潟県日中友好協会に加入すると規定し、総会の議決をいただきました。

今後も日中友好を中心としながら国際交流活動を展開して行きたい考えです。

いわふね国際交流協会事務局長 増田 純作

♪ 吉川日中 二つの講座開催中

5 月 11 日に総会を開き規約を変更して、名称を「吉川日中友好協会」に、事務局を吉川土地改良区内（上越市吉川区原之町 2010 番地 8）に置くこととなりました。

昨年に引き続き、新潟大学非常勤講師をされている斯日古楞(Si Ri Gu Leng)さんを講師に迎えて中国語講座を開いています。7 月 10 日に開講し、20 名ほどの参加者が中国の人たちの考え方や生活習慣などの解説を交えた講義を受けています。また、8 月 1 日からは中国料理の講習会も開いています。毎回 15 名ほどの参加者があり、区内のスカイトピア遊ランドに勤務する顧猛さんから、中国料理の手ほどきを受けています。

このほか、中国からの輸入農産物の生産現地を訪問し流通などについて研修する計画にも取り

組んでいます。

吉川日中事務局次長 加藤 昇



■ 中国語講座の受講生 楽しそうですね
(吉川区多目的集会場)

◆ 編集後記 ◆

会報の発行が大変遅くなり、会員の皆様に心よりお詫び致します。色々と困難な問題もありますが、担当者一同更に努力を重ねるつもりです。併せて皆様のご協力をお願い申し上げます。

文責：編集者 常任理事 巾 昭

発行人 理事長 奥村 俊二
編集者 常任理事 巾 昭
印刷所 有限会社 東新印刷

中国料理 張 園

代表取締役 中原 宗良

予約専用電話 025-247-2275

- 張園青山店 新潟市青山 5-6-1
- 張園けやき通店 新潟市米山 18-1
- 張園本町店 新潟市本町 6-1114-1
- 張園白根店 新潟市中塩俵字タフ 1452-1

刀削麺の店

張園白根店

12 月初旬オープン！

TEL.025-362-2890